

基本練習問題 19-2

<解答>

損益計算書		
I 売上高		140,000
II 変動売上原価		<u>67,200</u>
変動製造マージン		72,800
III 変動販売費		<u>8,400</u>
限界利益		64,400
IV 固定費		
1. 固定製造原価	38,500	
2. 固定販管費	<u>5,500</u>	<u>44,000</u>
営業利益		20,400
期末製品に含まれる固定製造原価		7,700
期首製品に含まれる固定製造原価		<u>0</u>
全部原価計算の営業利益		<u>28,100</u>

【解説】

直接原価計算方式で損益計算書を作成して営業利益を計算した後に固定費調整を行って全部原価計算の営業利益を算出する問題である。実務では、直接原価計算を採用している企業は外部報告目的のために固定費調整を行っているが、そのプロセスをたどる問題でもある。直接原価計算方式の損益計算書の作成方法は基本練習問題 19-1 で確認した通りなので詳細は割愛し、本問の最大のポイントである固定費調整について重点的に解説する。

直接原価計算方式と全部原価計算方式では固定製造原価の取り扱いが異なる。

- ・直接原価計算方式 38,500 円（当期発生額を全額計上）
- ・全部原価計算方式 30,800 円（ $38,500 \div 350 \times 280$ ）

両者の差は 7,700 円であり、この差がそのまま営業利益の差になる。全部原価計算の場合、期末製品に含まれる固定製造原価は費用計上しないが、全部原価計算の場合には期末製品に含まれる固定製造原価も費用計上する。このため、直接原価計算方式の場合には、全部原価計算の場合と比べて、費用が余分に計上されるため営業利益の金額はその分だけ小さくなる。

したがって、本問のように期首仕掛品及び期末仕掛品が存在しない場合には、全部原価計算方式で損益計算書を作成した場合、直接原価計算方式の場合よりも 7,700 円営業利益が多くなる。このような差が発生する原因は期末製品に含まれる固定製造原価にあるから、解答のように 7,700 円を記入する。期首製品は存在しないため 0 円となる。

《参考》全部原価計算方式で作成した損益計算書

損益計算書

I 売上高	140,000	
II 売上原価	<u>98,000</u>	①
売上総利益	42,000	
III 販売費及び一般管理費	<u>13,900</u>	②
営業利益	<u>28,100</u>	

①売上原価

変動費部分： $280 \times 240 = 67,200$ 円

固定費部分： $38,500 \div 350 \times 280 = 30,800$ 円

②販売費及び一般管理費

変動費部分： $280 \times 30 = 8,400$ 円

固定費部分：5,500 円